

# 教育漢字における慣用音

佐藤 宣 男

- 〔目次〕 はじめに 1. 調査・研究の方法、範囲 2. 慣用音の実態  
2-1 常用漢字音訓表にも認められている慣用音  
2-2 常用漢字音訓表には認められていない慣用音 まとめ

## はじめに

いうまでもなく漢字は中国語の文字である。日本人はそれを移入し、自分たちの文字として利用した。外来語としての、その中国語音を日本語化しつつも取り入れて日本語の漢字音とし、さらに日本語に翻訳して、それを「訓」として漢字の読みに加えた。漢字の読みは中国語に依拠する「音」と日本語に翻訳された「訓」の二種が成り立つことになる。

日本語漢字音（以下、字音という）は依拠した中国語音の時代性・地域性に関わって、呉音・漢音・唐音（宋音・唐宋音）の三種が成り立ち、それが重層的に用いられている。そして、その三種のほかに、より日本語化し変形されたものと考えられる「慣用音」なるものが加わる。

慣用音とはどのようなものであるのか、それを的確に説明することは難しい。一般の辞書についてみると、

○呉音・漢音・唐音のいずれでもなく、日本で広く使われている漢字音。「消耗」の「耗コウ」を「もう」、「情緒」の「緒ショ」を「ちょ」と読む類。（小学館刊『大辞泉』）

○呉音・漢音・唐音以外に、わが国で昔から通用している字音。「消耗」の「耗（こう）」を「もう」、「輸出」の「輸（しゅ）」を「ゆ」として用いる類。（岩波書店刊『広辞苑』第4版）

といった類いの説明がなされており、専門辞書の類では、

○漢字音の一種で、中国の字音と著しく相違した字音、または甚だしい過誤によってできた字音が、日本における習慣によって広く社会的に用いられ、慣習の上で正当と認められているもの。（国語学会編『国語学辞典』「慣用音」 中田祝夫執筆）

○明治時代に入ってからの主として漢和辞典で、韻書・音義の反切及び韻図に基づいて演繹的に決定せられた呉音・漢音形と異なる場合の、わが国の具体的文献に見出される字音形に与えられた通称。（明治書院刊『漢字百科大事典』「慣用音」 沼本克明執筆）

○中国や朝鮮に起源を求めたい字音の性質を持つ読み方のある漢字（国語学会編『国語学大辞典』「漢字」 林大・山田俊雄執筆）

とある。

字音が中古中国語音に依拠するものであるとしても、中国語と日本語との音韻体系の差異から、中国語音のままに取り入れられるということはある得ず、何らかの変形を余儀なくされる。その変形を、どこまでが中国語音に関わりをもち、どこからが中国語音から逸脱した、日本語特有の受けとめ方と理解するかということであろう。前出の「韻書・音義の反切及び韻図に基づいて演繹的に決定せられた呉音・

漢音形と異なる（沼本克明）」ものという説明に見るように、従来の漢和辞典における呉音・漢音の示し方には、演繹的に作り出された面を見ることができ、そのような呉音・漢音が日本語の中で実際に用いられたのかどうか、疑念を覚えざるを得ないような事例も多いように思う。このようなこととも関わって、慣用音については正確な説明ができるのかどうか、はなはだおぼつかない状況にあるということになる。特に、古代中国語の知識を十分に持ちがたい者にとってはなおさらである。

私がここで述べることも、そのような大きな制約を抱えた上での作業とならざるを得ない。そのことを自覚しつつ、最近の漢和辞典類の示す、最新の知識に依りながら、慣用音について現在どのようなことが問題となるのか、その実態を明らかにしてみようと思う。

ここで取り上げる漢和辞典の類は、次の4種である。

1. 『大字源』（尾崎雄二郎他編 角川書店）
2. 『大漢語林』（鎌田正・米山寅太郎編 大修館書店）
3. 『学研漢和大事典』（藤堂明保編 学習研究社）
4. 『新大事典』（栄田一郎他編 講談社）

必要に応じて、『大漢語林』の基となった『漢語林』（鎌田正・米山寅太郎編 大修館書店）にも触れることがある。『大字源』は、従来一般の漢和辞典と異なり、「漢音を優先してすべての親字に掲げ、呉音・唐音については、使用されている音に限り掲出した。慣用音は、必要に応じて掲げた」と凡例にあるように、字音の掲出に当たって取捨選択を行ない、演繹的・形式的な措置を避けているところがある。一つの見識ある対処法として注目に値しよう。

本稿では、この『大字源』を基準とし、他の辞典は対照資料として扱う。これらは、以下において、「源（『大字源』）」、「林（『大漢語林』）」、「学（『学研漢和大事典』）」、「新（『新大事典』）」、「漢（『漢語林』）」の略称を用いる。

## 1. 調査・研究の方法、範囲

教育漢字の中から『大字源』を中心に慣用音の記載のある漢字を抜き出し検討を加えていく。その慣用音が常用漢字音訓表でも認められているものと常用漢字音訓表には記載されていないものとに分けて述べることにする。

漢字は主として音に基づき五十音順に配列し（現代仮名遣いの書き表わし方による）、見出しとする。音が一般的でないものについては訓を用いることもある。どの音をとるかは常識的な枠の中で判断し（私意的になるところもあるだろう）、呉音・漢音などにより統一的に扱うことはあえて行なわない。漢字の後に付する数字（カッコの中）は配当学年を示す。漢字のすぐ後に記す音は慣用音であり、説明の中で音を記載する場合は、「呉音・漢音・慣用音」（「呉音・漢音」のみ記すことあり。－は空欄であることを表わす）の順に配列する。唐音は必要に応じて触れるにとどめる。音や説明の中の字音の記載には字音仮名遣いを適用し、あえて現代仮名遣いに従うことはしない。

中国の韻書を利用する場合は、特に断らない限り『広韻』を用いることとし、必要に応じて、『韻鏡』『切韻』等も用いる。古辞書に見られる字音表記は「名：X」（観智院本『類聚名義抄』）「色：Y」（『色葉字類抄』）の形で記し、色葉字類抄の場合は、その字音の見られる語例をカッコの中に示す。

なお、各漢和辞典における慣用音の扱いは二種類に大別される。たとえば、

- (1) 覚 — カク（呉漢）古岳切（「覚」入声） 二 カク（慣） カウ（漢）古孝切（「效」去声）  
 <大字源>
- (2) 覚 — カク（「覚」入声） 二 漢カウ・呉ケウ（「效」去声） 慣カク  
 <大漢語林>

のごとくである。

『大字源』『学研漢和大字典』は慣用音に対応する呉音・漢音を指定する。「覚」の慣用音「カク」は、呉音・漢音「カク」(覚韻)ではなく、漢音「カウ」(効韻)に対応するが故に、慣用音の扱いを受けるのである。一方、『大漢語林』『新大字典』は、どの呉音・漢音に対応するか、指定しない。前者においては慣用音の捉え方に、編者なりの明確な枠付けが示されるが、後者ではそれが曖昧となる。前者の立場をとる場合、その枠付けの根拠を明確に示すことの困難さが問題となるであろう。漢和辞典により、このような差異が認められることには、十分に注意を払う必要がある。

## 2. 慣用音の実態

### 2-1 常用漢字音訓表にも認められている慣用音

◆アツ 庄(5) アツ 源など各辞典には「アフ・アフ・アツ」とある。狎韻所属であり、本来～pの閉鎖音韻尾をもつものであるから、韻尾は～フとあるべきものであって、アツは慣用音とされる。名：アフ(音注「押 アフ(傍記)」として)

◆イク 育(3) イク 漢のみイクを慣用音とする。「キク・キク・イク」と呉音・漢音「キク」と考えるからである。林は「イク・イク・ー」に改め、他書同様、慣用音を認めていない。名：イク(和音として「余六反」も) 色：イク(イクサイ育彩)

◆イン 員(3) キン 学は「ウン・キン・ー(文・問韻)」(ほかに「エン・エン・ー(先(仙)韻)」も上げる)とし、キンを漢音とする。新は慣用音「キン」とし、さらに「エン・エン(先韻)」「ヨン・ヨン(文韻)」「キン・キン(眞韻)」と記載する。源は慣用音「キン」を「エン・エン(先韻)」(ほかに「ウン・ウン(文・問韻)」も上げる)に対応させ、林は「エン・エン」「ウン・ウン」を上げた上で、慣用音「キン」とする。名：(音注「圓」「運」) 色：キン(シャウキン正員)

◆イン 院(3) キン 源はキンを慣用音とし、ほかに「エン・エン(霰韻)」「ー・クワン(寒韻)」も上げる。ことさらにキンを「エン(霰韻)」に対応させることはなく、源の一般的処理方法とは異なる扱いとなっている。学は慣用音「キン」を「エン・エン」に対応させ、他音は記載しない。林・新も慣用音「キン」とし、ほかに「エン・エン(霰韻)」「グワン・クワン(寒韻)」「ヨン・エン(阮韻)」を上げる。なお、『広韻』における「院」の所属は桓韻および線韻である。名：キン(「俗云」として他に「干眷反」も) 色：キン(「干變反」も)

◆オウ 横(3) ワウ 新のみ慣用音「ワウ」とする。さらに「ワウ・クワウ」と呉音にもワウを上げる。源・林・学ともに「ワウ・クワウ・ー」として、ワウを呉音とする。色：ワウ(ワウシ横死)

◆ガ 画(2) グワ 学は「エとグワ・クワク・ー(卦韻)」とあって、グワを呉音の一つとする。源は慣用音「グワ」を「ー・クワク(陌韻)」「ー・クワイ(卦韻)」の両者に対応させる。林は慣用音「グワ」とした上で、「ワク・クワク(陌韻)」「ゲ・クワイ(卦韻)」を載せる。新は慣用音を「グワ」とし、ほかに「ギャク・クワク(陌韻)」「エ・クワイ(卦韻)」を上げる。名：(音注「卦」) 色：グワ・カク(畫)

◆カイ 回(2) エ 林のみ慣用音「エ」を認め、さらに「クワイ・クワイ(灰韻)」「グワイ・クワイ(隊韻)」と記載する。源・新(灰・隊韻)、学(灰韻)は、ともに「エ・クワイ・ー」とあって、エを呉音とする。名：(音注「廻」) 色：クワイ(回)

◆ガイ 街(4) ガイ 源は「ー・カイ(佳韻)」に、林・学・新は「ケ・カイ」に対応させる。

名：(音注「皆」「佳」) 色：ガイ(ガイク街衢)

◆カク 覚(4) カク 源は「一・カウ(效韻)」に、学は「ケウ・カウ(效韻)」に対応させ、ほかに「カク・カク(覚韻)」も上げる。林は慣用音「カク」のほかに、「カク・カク(覚韻)」「ケウ・カウ(效韻)」を載せる。新は「コク・カク(覚韻)」「ケウ・カウ(效韻)」と、「カク」を漢音として慣用音を認めない。名：(音注「角」) 色：カク(カクゴ覚悟)

◆キ 期(3) ゴ 林は「ゴとギ・キ・一」、学は「ゴ・キ・一」として、「ゴ」を呉音に含める。源は「一・キ」に対応させる。新は慣用音「ゴ」のほかに、「ギ・キ」「キ・キ」(ともに支韻)を上げる。名：(音注「其」) 色：キ・ゴ(期 キ・コス)

◆キ 危(6) キ 源・林・新は「ギ・ギ」に、学は「グキ・グキ」に対応させる。名：クキ(和音として) 色：クキ(アングキ安危)

◆キユウ 宮(3) グウ 源・新は「ク・キユウ」に、林は「クとクウ・キウ」に、学は「クとクウ・キユウ」に対応させる。名：クウ(和音として、濁音符「レ」あり 音注「弓」) 色：グウ(チウグウ 中宮 「宮」に上声濁点)

◆ギョ 漁(4) レフ 「獵(レフ)」に混同して生じた慣用音とする。名：(音注「魚」) 色：ギョ(漁)

◆キョウ 競(4) キャウ 源は「一・ケイ」に、林・学・新は「ギャウ・ケイ」に対応させる。名：キャウ(和音として 「渠敬反」) 色：ケイ(ケイバ競馬)

◆キョウ 郷(6) ガウ 源など「カウ・キャウ」に対応させる。名：(音注「香」) 色：カウ(カウシ郷司)・キャウ(郷)

◆クウ 空(1) クウ 林は「クとクウ・コウ・一」、学は「クウ・コウ・一」として、「クウ」を呉音に含める。源・新は「ク・コウ」に対応させる。名：クウ(和音として 「口公反」も) 色：クウ(空)

◆グン 軍(4) グン 源・林・学は「クン・クン」に、新は「コン・クン」に対応させる。名：具ン(「具」に平声濁点 和音として) 色：クン(「軍」に平声清点)

◆ゲキ 劇(6) ゲキ 源は「一・ケキ」に、林・学・新は「ギャク・ケキ」に対応させる。名：ケキ(音注の文字として 「劇」に入声清点) 色：ケキ(ケキサウ劇草 「劇」に入声清点)

◆ゲキ 激(6) ゲキ 源は「一・ケキ(錫韻)」に、林・学・新は「キヤク・ケキ」に対応させる。名：ケキ(音注の文字として 「激」に入声清点)

◆ケツ 欠(4) ケツ 本来は「缺」であり、「欠(あくび)」とは異なる。学は「缺」を「ケチ・ケツ・一」、「欠」を「コム・ケム・一」として、慣用音は記載しない。源は慣用音「ケツ」を認めた上で、「缺」を「一・ケツ(屑韻)」「キ・キ(紙韻)」「ケン・ケン(霰韻)」として、漢音にも「ケツ」を認め、「欠」は「ケン・ケン(陷韻)」とする。林は「缺」を「ケチ・ケツ」、「欠」を「コン・ケン」とし、慣用音に「ケツ」と「カン」の二音を認める。新は「欠」に対して「ケン・ケン・ケツ(陷韻)」、「缺」に対して「ケチ・ケツ・一(屑韻)」「キ・キ・一(紙韻)」と記して、慣用音「ケツ」は「欠」に対応するものとしている。「欠」名：カム(和音として 「丘劔反」も) 色：カン(カンシャウ欠剩 リャウカン量欠) 「缺」名：(「苦穴反」)

◆ゲツ 月(1) グッツ 源・林・新は「グッチ・ゲツ」に、学は「ゴチ・グエツ」に対応させる。名：(魚厥反) 色：クッツ(ハンクッツ半月 「月」に入声濁点)

◆ケン 研(3) ケン 源など「ゲン・ゲン」に対応させる。名：(五堅反) 色：ケン(ケンセイ研精)

◆ケン 驗(4) ケン 源など「ゲン・ゲン」に対応させる。名：下ム(和音として、「平平」の清音声符あり「魚欠反」も) 色：ゲム(リャウゲム靈驗「驗」に入声濁点)

◆ゲン 減(5) ゲン 林は「ゲン・カン・ー」「ケン・カン・ー」、学は「ゲム・カム」「ケム・カム」とし、「ゲン(学はケム)」を呉音とする 源は「カン・カン」に対応させる。新は慣用音を「ゲン」とし、さらに「ゲン・カン」「ケン・カン」も記載する。

◆コ 己(6) コ 林・学は「コ・キ・ー」として、「コ」を呉音とする。源・新は「キ・キ」に対応させる。名：キ・シ(居里反 音注「似」も) 色：キ(キ己)・コ(チコ知己)

◆コウ 後(2) ゴ 源は「ー・コウ」に、林・学・新は「グ・コウ」に対応させる。名：コオ(和音として 音注「后」も) 色：コ(コエン後宴「後」に平声清点)・コウ(キャウコウ向後「後」に平声清点)

◆コウ 紅(6) ク 源など「グ・コウ」に対応させる。名：具ウ(和音として 音注「洪」も) 色：コウ(コウエフ紅葉)

◆ゴウ 合(2) ガフ 林は慣用音「ガフ」を上げ、さらに「ガフ・カフ」「カフ・カフ」と、呉音にも「ガフ」を載せる。源・新は「コフ・カフ」「ゴフ・カフ」の二音に、学は「ゴフ・カフ」に対応させる。名：(胡答反 音注「閤カク(「カフ」の誤り?)」) 色：ガウ(ガウヤク合薬「合」に入声濁点) カウ(カウリョク合力「合」に入声清点)

◆コク 告(4) コク 学は「コク・コク(沃韻)」「カウ・カウ(号韻)」を上げるのみで、慣用音は認めない。源は「コウ・カウ(号韻)」に対応させ、ほかに「コク・コク(沃韻)」「コク・キク(屋韻)」も上げる。林は慣用音「コク」のほかに、「カウ・カウ(号韻)」「コク・コク(沃韻)」も記載する。新は慣用音「コク」を上げ、さらに「コウ・カウ(号韻)」「コク・コク(沃韻)」「コク・キク(屋韻)」をも載せる。名：我ウ(和音として) 色：カウ(ムカウ誣告)

◆サ 差(4) サ 源は「シ・シ(支韻)」に対応させ、ほかに「サ・サ(歌韻)」など五類の音を上げる。学は「セ・サイ(佳・卦韻)」に対応させ、ほかに「シャ・サ(麻韻)」「シ・シ(支韻)」も上げる。慣用音「サ」のほかに、林は「シャ・サ(麻韻)」「シ・シ(支韻)」「シャ・サイ(佳・卦韻)」を、新は「セ・サ(麻韻)」「サ・サ(歌韻)」などの五類の音を上げる。名：シャ(和音として「楚宜、楚佳二反」も) シ(「蹉」の音注「差シ」として) 色：サ(クッサ過差)・シャ(シャベツ差別)

◆ザイ 罪(5) ザイ 林・学は「ザイ・サイ・ー」と、呉音にする。源は「セ・サイ」に、新は「ゼ・サイ」に対応させる。名：ザイ(和音として 濁音符「レ」あり) 色：ザイ(ザイシャウ罪障「罪」に平声濁点)

◆サツ 殺(4) セツ・サツ 源は「ー・サツ(黠韻)」に対応させる。慣用音「セツ」のほかに、林は「セチ・サツ(黠韻)」「サチ・サツ(曷韻)」など、新は「セチ・サツ(黠韻)」「サチ・サツ(曷韻)」「セチ・セツ(屑韻)」「セ・サイ(霽韻)」なども上げる。学は慣用音を「サツ」として、「セイ・サイ(卦(怪)韻)」に対応させる。名：セチ(和音として) 色：セツ(セツガイ殺害)・サツ(カフサツ合殺)

◆サツ 冊(6) サツ 麦韻(韻尾~k)に属し、本来は「シャク・サク」(林・学・新 源は「ー・サク」となるものである。名：シャク(「策」の項に「冊シャク」「又白反」も) 色：シャク(タンシャク短冊)

◆ザツ 雑(5) ザツ・ザフ 源・林は「ザフ・サフ」に対応させる。慣用音に「ザツ」「ザフ」の二音を認めた上で、学は「ゾフ・サフ」に対応させ、新は「ゾフ・サフ」「ソフ・サフ」の二類を上

げる。名：坐フ（和音として「徂合反」も） 色：ザウ（ザウゲイ雑芸「雑」に去声濁点）

◆ジ 次（3） ジ 源など「シ・シ」に対応させる。名：シ（和音として「平声清点あり」「七四反」も） 色：シ（シクワン次官）

◆ジ 事（3） ズ 林のみ慣用音「ズ」を認め、「ジ・シ」に対応させる。源・学・新は「ジ・シ・ー（新はほかに「シ・シ・ー」も）」として、慣用音は認めない。名：ジ（和音として、平声濁点あり「鋤吏反」も） 色：シイ（上87オ）

◆ジツ 実（3） ジツ 林・学・新は「ジチ・シツ」に、源は「一・シツ」に対応させる。名：シチ（濁音符「レ」あり「時質反」も） 色：シチ（ジチケム実検「実」に入声濁点）

◆シュ 守（3） ス 林・新は慣用音「ス」を認め、「シュ・シウ」に対応させる。源・学は「スとシュ・シウ」とし、「ス」を呉音に含めて、慣用音は認めない。名：（音注「首」） 色：ス（ルス留守、チンスフ鎮守府）

◆シュウ 宗（6） シュウ 源は「一・ソウ」に、林は「ソウ・ソウ」に、学は「ソ・ソウ」、新は「ス・ソウ」に対応させる。名：主ウ（和音として） 色：ソウ（宗ソウ 傍記として）

◆ジュウ 住（3） チュウ 源は「チュ・チュ」に、林・新は「ヂュ・チュ（新はほかに「ツ・チュ」も上げる）」に対応させる。学は「ヂュウ・チュウ・ー」として、呉音「ヂュウ」を認め、慣用音は記載しない。名：地ユ（和音として、高山寺本に「観智院本は「地音」とある「雉俱反」も） 色：チウ（チウチ住持「住」に平声濁点）

◆ジュウ 従（6） ジュウ 源は「ジュ・ショウ（冬韻）」に対応させる。学は「シュ・ショウ（冬韻）」に対応するものとし、ほかに「ジュとジュウ・ショウ（冬韻）」も上げる。新は慣用音「ジュウ」のほかに、「ジュ・ショウ（冬韻）」なども上げる。林は慣用音に「ジュウ」「ジュ」の二音を認め、ほかに「ジュウ・ショウ（冬韻）」なども上げる。名：ショフ・シュウ（「縦」の音注として「従」に去声清点） 色：シュ（シシウ侍従、シュソウ従僧）・ショウ（バイショウ陪従「従」に去声清点）・スウ（「従祖父」の「従」の右に「スウ俗」と傍記）

◆ジュウ 縦（6） ジュウ 源は「一・ショウ」に、林は「シュウ・ショウ」に、学は「シュ・ショウ」に対応させる。新は慣用音「ジュウ」とし、「シュ・ショウ」（宋・鍾・冬韻）、「ス・ソウ」（董韻）、「ズ・ソウ」（東韻）を上げる。名：シュウ（「従」の音注として、「縦」に去声清点）

◆シユク 祝（4） シウ 源は「シユク・シユク（屋韻）」に対応させ、ほかに「シュ・シウ（宥韻）」も上げる。林・学・新には「シュ・シウ（宥韻）」（ほかに「シユク・シユク（新は「ソク・シユク」）（屋韻）」も）とあって、慣用音の記載はない。中田祝夫は、「意義の異なるに応じて音も変わるものがある」として、シユクは「はふり」の意であり、「祝賀・祝文・祝日」の「祝」は、「シュウとある方が中国字音に忠実」であると述べる。そして、後者をシユクと読むのは「過誤ではあるが、必ずしも慣用音としない」という立場をとる（『国語学辞典』）。『辭海』（台湾中華書局）には、（甲）屋韻所属、（乙）宥韻所属、（丙）遇韻所属に三分類し、（甲）は「祭主贊辭者」、（乙）は「或作祝、亦作 詛也」、（丙）は「見祝藥條」とある。名：（音注「粥」「之授反」も） 色：シウ（「祝イハウ」の傍記として）

◆ジュツ 述（5） ジュツ 学には「ズチとジュツ・シュツ・ー」とあって、「ジュツ」を呉音に含め、慣用音は認めない。源は「一・シュツ」に、林・学・新は「ジュチ・シュツ」に対応させる。名：（音注「朮」「術」）

◆ジュツ 術（5） ジュツ 学は「ズチとジュツ・シュツ・ー」として、「ジュツ」を呉音とする。源は「一・シュツ」に、林・新は「ジュチ・シュツ」に対応させる。名：（音注「述」） 色：ジュツ

(ヂジュツ治術 「術」に入声濁点)・ズキツ(サンスキツ算術)・スツ(スツ術)

◆ジュン 準(5) ジュン 源など「シュン・シュン」に対応させる。色：シュン(シュンキョ准拠)

◆ジョ 除(6) ヨ 源など「チョ・チョ」に対応させる。名：地ョ(和音として 音注「儲」)色：チ(チモク除日 「除」に去声濁点)・チョ(ハイチョ拝除)

◆ジョウ 蒸(6) ジョウ 源など「ショウ・ショウ」に対応させる。名：(章繩反) 色：ショウ(蒸 平声清点?)

◆スイ 推(6) スイ 源は「一・タイ(灰韻)」に対応させ、ほかに「スイ・スイ(支韻)」も上げる。林・学・新は慣用音を認めず、「スイ・スイ(新は「スキ・スキ)」と、呉音・漢音に「スイ(スキ)」を上げる。名：スイ(和音として 「土堆反」、音注「吹」も) 色：スイ(スイイ推移)

◆スン 寸(6) スン 学には「スン・ソン」とあって、「スン」を呉音とする。源・林・新は「ソン・ソン」に対応させる。名：(音注「村」) 色：スン(寸)・ス(スハク 寸白)

◆セ 世(3) セ 源など「セイ・セイ」に対応させる。名：(音注「勢」) 色：セ(セゾク世俗)・セイ(セイト世途)

◆ゼイ 税(5) ゼイ 源・林は「セイ・セイ」に、学・新は「セ・セイ」に対応させる。名：セイ(僧上109 「鋭」の音注として 去声圈点あり) 色：セイ(ソセイ租税)

◆セキ 石(1) シャク・コク 学は「ジャク・セキ・コク」とし、慣用音は「コク」のみ認め、「シャク」には触れない。源・林・新は「ジャク・セキ」に対応させる。名：(常隻反) 色：シャク(ジシャク磁石)・サク(サクナムサウ石楠草、チウサク鑰石)・コク(石 「斛コク」に同じものとして)・セキ(ヤクセキ薬石)

◆セキ 責(5) セキ 源など「シャク・サク」に対応させる。名：者ク(和音として 「側革反」も) 色：セキ(カムセキ勘責)

◆セツ 接(5) セツ 源など「セフ・セフ」に対応させる。本来、葉韻(韻尾~P)の文字である。色：セフ(接 「サシアハス」の項)

◆ゼツ 舌(5) ゼツ 学は「ゼチとゼツ・セツ」とし、「ゼツ」を呉音の一つとする。他は「ゼチ・セツ」に対応させる。名：ゼチ(和音として 「食折反」も) 色：ゼチ(ケイゼチ鶏舌)・セツ(クセツ口舌)

◆ゼツ 絶(5) ゼツ 学は「ゼチとゼツ・セツ」とし「ゼツ」を呉音の一つとする。源は「一・セツ」に、林・新は「ゼチ・セツ」に対応させる。名：ゼチ(和音として 「白雪反」も) 色：ゼチ(ゼチキキ絶域 「絶」に去声清点?)

◆セン 洗(6) セン 源は慣用音「セン」とし、さらに「セン・セン(銑韻)」「サイ・セイ(霽韻)」も上げる。林・学・新は「セン・セン・一」とし、慣用音を認めない。名：セン・セイ(「セイ」は和音とする) 色：セン(センタク洗濯 「洗」に上声清点)

◆セン 染(6) セン 源は「一・ゼン」に、林・学・新は「ネン・ゼン(学は「ネム・ゼム)」に対応させる。名：(音注「冉」 「冉」に上声濁点)

◆ゾウ 造(5) ザウ 源は「一・サウ」に、学は「サウ・サウ」に対応させる。慣用音「ザウ」のほかに、林は「ザウ・サウ(号韻)」「サウ・サウ(皓韻)」も、新は「サウ・サウ(号韻)」「ゾウ・サウ(皓韻)」も上げる。名：ザウ(和音として、濁音符「レ」あり 「徐道反」も) 色：サウ(サウクッ造化 「造」に去声清点)

◆ゾウ 増(5) ゾウ 源など「ソウ・ソウ」に対応させる。名：ソウ(和音として 「ソウ」に

「平上」の声点) 色: ソウ (バイゾウ倍増 「増」に去声濁点)

◆ソク 側 (4) ソク 学は「シキ・ソク」とし、「ソク」を漢音とする。源は「一・ショク」に、林・新は「シキ・ショク」に対応させる。名: ソク (和音として 「俎棘反」も) 色: ソク (ソクイン側隠)

◆ソク 測 (5) ソク 学は「シキ・ソク・一」とし、「ソク」を漢音とする。源は「一・ショク」に、林・新は「シキ・ショク」に対応させる。名: シキ (和音として 「初力反」も)

◆ゾク 属 (5) ゾク 源は「一・ショク」に対応させ、ほかに「ゾク・シヨク」も上げる。林・学・新は「ゾク・シヨク・一」とし、ゾクを呉音と考え、慣用音を認めない。名: ソク (和音として 音注「燭」には「ショク」の傍記あり) 色: ソク (クワンソク眷属・フソク付属)

◆ソツ 卒 (4) ソツ 学は「ソチ・ソツ (月韻)」(ほかに「シュチ・シュツ (質韻)」も) と、ソツを漢音として慣用音は認めない。源は「一・シュツ」に対応させ、ほかに「一・ソツ」も上げる。林・新は慣用音「ソツ」のほかに「ソチ・ソツ (月韻)」「シュチ・シュツ (質韻)」も上げる。名: ソチ (和音として「祖没反」も) 色: ソツ (ソツシ卒尔)

◆ソツ 率 (5) ソツ 学は「ソチとシュチ・ソツ・一」と、ソツを漢音と扱い、慣用音を認めない。源は「一・シュツ」に対応させ、林・新は慣用音「ソツ」のほかに「シュチ・シュツ」を上げる。名: ソチ (和音として 「所律反」「所類反」も) 色: ソツ (インソツ引率)

◆ダ 打 (3) ダ 学には「チャウ・テイ・ダ (唐音)・一」とあって、ダは唐音と扱われ、慣用音を認めていない。源は「タ・タ」に対応され、林・新は慣用音「ダ」とした上で、「チャウ・テイ」「タ・タ」を上げる。高松 (1982) では、「中・近世においては、やはり唐音と規定してよいだろうけれども、近代に入って後の、その濁音形には一寸引懸かる」(P.731) と述べている。名: チャウ (音注「頂」も) 色: タ (タキウ打毬)

◆タイ 退 (5) タイ 源は「トン・トン」に対応させ、ほかに「タイ・タイ」も上げる。学は「タイ・タイ・一」として、呉音・漢音「タイ」を認め、慣用音は記載しない。林は「ツイ・タイ・一」、新は「テ・タイ・一」として、「タイ」は漢音と扱う。名: タイ (和音として 「土對反」も) 色: タイ (タイシュツ退出)

◆ダン 断 (5) ダン 林・学・新は「ダン・タン・一」として、「ダン」を呉音と扱う。源は「タン・タン (翰韻)」に対応させ、ほかに「ダン・タン」も上げる。名: タン (和音として 濁音符「レ」あり 音注「短」も) 色: タン (キウダン紉断 「断」に平声濁点)

◆チャ 茶 (2) チャ 源は「一・サ」に、新は「ジャ・サ・ (唐音ナシ)」に、林は「ダ・タ・サ (唐音)」に、学は「チャ・タ・サ (唐音)」に対応させる。高松 (1982) では、「従来の意では慣用音の名称がこれに与えられても致し方がない。しかし、本書の立場で云えば、これは『(一) 中国原音より導き出せるもの』であることは確実である」とし、「チャの確立を実証出来るのは院政期である」(P.706) と説明している。名: (宅加反) 色: チャ (茶 「茶」に平声清点)

◆チュウ 注 (3) チュウ 源は「チュ・チュ」「シュ・シュ」に、林は「チュ・チュ」「シュ・シュ」に、学は「ス・シュ」に、新は「チュ・チュ」に対応させる。名: シュ・チュ (和音として 音注「鑄」も 「チュ」は「柱」の音注字「注」の傍記として) 色: チウ (チュウキ注記)

◆チュウ 柱 (3) チュウ 学は「ヂュウ・チュウ」と、「チュウ」を漢音とし、慣用音を認めない。林は「ヂュ・チュ」「チュ・チュ」として、いずれにおいても「チュ」は漢音と扱う。源は「チュ・チュ」に、新は「ヂュ・チュ」「ツ・チュ」に対応させる。名: チウ (音注「注チュ」による 「直圭反」も) 色: チウ (柱ハシラ)



◆チン 賃(6) チン 林・新・学は「ニン・チン(学は「ニム・チム」)」に対応させる。源は「一・ヂン」と呉音の記載がない。名：ニム或チム(和(音)として「乃禁反」も) 色：チン(ウンチン運賃)

◆ツウ 通(2) ツウ 林には「ツとツウ・トウ・一」、学には「ツウ・トウ・一」とあり、「ツウ」を呉音に含める。源・新は「ツ・トウ」に対応させる。高松(1982)では、呉音「ツウ・ツ」(中古期は「ツウ」、中世以降に「ツ」)、漢音「トウ」と解し、いわゆる慣用音「ツウ」は呉音に含められるものと説明し、林と同じ立場を示している(P.679)。名：ツウ(和音として「勅東反」も) 色：ツウ(ルツウ流通「通」に上声清点)

◆ツウ 痛(6) ツウ 林・学は「ツウ・トウ・一」として、「ツウ」を呉音に扱う。源・新は「ツ・トウ」に対応させる。名：ツウ(和音として音注「洞」も) 色：ツウ(クツウ苦痛)

◆テキ 適(5) テキ 源は「一・セキ」に対応させ、ほかに「チャク・テキ」も上げる。林は慣用音「テキ」を指摘した上で、「チャク・テキ」も上げる。学は「シャク・セキ」に対応させ、ほかに「チャク・テキ」も上げる。新は慣用音「テキ」のほかに、「チャキ・テキ」「チャク・テキ」も上げる。名：(音注「釈」「敵」) 色：テキ(「適カナフ」の傍記)

◆ド 土(1) ド 林は「ド・ト・一」とし、「ド」を呉音と扱う。源は「一・ト(夔韻 他魯切)」に対応させ、ほかに「ド・ト」も上げる。学は「ツ・ト」に対応させる。新は慣用音「ド」を上げ、その上で「ツ・ト」(夔韻)、「ツ・ド」(夔韻)、「テ・タ」(馬韻)と記す。名：ド(音注「吐」の傍記として「ト」に平声濁点) 色：ド(土器「土」に平声濁点)

◆トウ 登(3) ト 源など「トウ・トウ」に対応させる。名：(音注「燈」) 色：ト(トミ登美・ノト能登)・トウ(トウダン登壇)

◆ドウ 銅(5) ドウ 林は「ドウ・トウ」として、「ドウ」を呉音と扱う。源は「一・トウ」に、学は「ヅウ・トウ」に、新は「ヅ・トウ」に対応させる。名：(音注「同」「同」に去声濁点) 色：トウ(銅 去声清点?)

◆ドウ 導(5) ダウ 林・学は「ダウ・タウ」として、「ダウ」を呉音と扱う。源・新は「ドウ・タウ」に対応させる。名：ダウ(濁音符「レ」あり 音注「盜」も) 色：タウ(インダウ引導「導」に平声濁点)

◆ニュー 乳(6) ニュウ 林・学は「ニュー(学は「ニウ」)・ジュ」として、「ニュー(ニウ)」を呉音と解する。源・新は「ニュ・ジュ」に対応させる。名：ニウ(乳酪ニウノカユ「乳」に「而主反」も) 色：ジュ(九乳キウジウ「乳」に去声濁点)

◆ネツ 熱(4) ネツ 新は「ネツ・ゼツ」に、林は「ネチ・ゼツ」に対応させる。学は「ネチとネツ・ゼツ・一」と、「ネツ」を呉音に含める。源は「一・ゼツ」と呉音の記載がない。名：ネイ(和音として「而列反」も) 色：ネツ(ネツキ(チ?)熱地)

◆ノウ 納(6) タフ・ナ、ナツ・ナン 源は「タフ・ナ」を慣用音とし、「ナフ・ダフ」に対応させる。林は「ナフ・ダフ」に対して、慣用音は「タフ」「ナツ」「ナ」「ナン」の四音を上げる。学は慣用音を「タフ」とし、「ノフとナフ・ダフ・ナ(唐音)」と「ナ」は唐音とする。新は「ノフ・ダフ」に対応させて、慣用音「タフ」「ナフ」「ナ」「ナツ」「ナン」を上げる。名：ナフ(「禾ナフノフ」とあり。「奴答反(「奴」に平声濁点)」も)

◆ノウ 脳(6) ナウ 林・学は「ナウ・ダウ・一」と、「ナウ」を呉音とする。源・新は「ノウ・ダウ」に対応させる。名：(「奴老反」音注「惱」も) 色：トウ(頭脳トウナウ(傍記に「トウタウ」も「脳」に上声濁点)

◆ハ 派(6) ハ 林は「ハ・ハイ・ー」と、「ハ」を呉音とする。源は「ー・ハイ」に、学・新は「ヘ・ハイ」に対応させる。

◆バイ 倍(3) バイ 林・新は「バイ・ハイ・ー」と、「バイ」を呉音とする。学は「バイとベ・ハイ・ー」と、「バイ」を呉音の一つとする。源は「ー・ハイ(隊韻)」に対応させ、ほかに「バイ・ハイ(賄韻)」も上げる。名：ハイ・ヘ(和(音)として「薄乃反」も) 色：バイ(バイゾウ倍增「倍」に去声濁点)

◆ハク 博(4) バク 源など「ハク・ハク」に対応させる。名：(補各反) 色：ハク(ハクエキ博奕「博」に入声濁点)・ハン(ハンシン博勞「博」に入声濁点)

◆ハツ 発(3) ホツ 学は「ホチとホツ・ハツ・ー」として、「ホツ」を呉音に含める。源は「ー・ハツ」に、林・新は「ホチ・ハツ」に対応させる。名：ホツ(音注「ハチ」も) 色：ハツ(ハツキ発起)・ホツ(ホツキ発起)

◆ハン 反(3) タン 林・学は「ホン・ハン・タン」と慣用音「タン」を認め、「タンと読むのは段の草書体からの字」(林)、「段に当てた用法」(学)と説明して、当て字説をとる。新は「ホン・ヘン」「ベン・ハン(韻)」に対して慣用音「タン」を認める。源は「ホン・ハン・ー」「ベン・ハン・ー」と、慣用音を記載しない。名：ヘン・ホン(和(音)として「非遠反」も) 色：ハン(ハンコムカウ反魂香「反」に上声清点、ワウハン往反「反」に上声濁点)・ホン(ホンコ反故「 hog 俗」も)

◆ハン 坂(3) ハン・バン 新は「ホン・ヘン(阮韻)」「ベン・ハン(潜韻)」を上げた上で、慣用音「ハン」を載せる。学は「ベン・ハン」に対応させて、慣用音「バン」を認める。源は「ー・ハン・ー」、林は「ホン・ハン・ー」として、慣用音の記載がない。名：(音注「反」) 色：ハン(「坂サカ」の傍記)

◆ハン 判(5) バン・ハウ 源・学・新は「ハン・ハン」に対して、慣用音「バン」を上げる。林では「ハン・ハン」に対して慣用音を「バン」と「ハウ」とする。名：(普半反) 色：ハン(ハンズ判)

◆ハン 板(3) バン 源・林では「ハン・ハン」に、学では「ヘン・ハン」に、新では「ヘン・ハン」「ベン・ハン」に対応させる。名：(補欄反 版) 色：ハン(「板イタ」の傍記として「板」に上声清点)

◆バン 番(2) バン 源・学は「ホン・ハン」に、林は「ハン・ハン」に対応させる。新は慣用音「バン」を指摘するほか、六種の音群のうちに「バン・ハン(寒韻)」も上げる。名：ハン(「飜」の音注として、「番」に平声清点) 色：バン(バンシャウ番匠「番」に去声濁点)

◆ヒ 否(6) ヒ 学は「フ・フウ・ー」「ピ・ヒ・ー」として、慣用音の記載はない。源は「フ・フ(有韻)」に対応させ、ほかに「ヒ・ヒ(紙韻)」も上げる。林・新は慣用音「ヒ」を認め、さらに「フ・フウ(有韻)」「ピ・ヒ(紙韻)」も載せている。名：(音注「孚」) 色：フ(ジツフ実否「夷」に上声清点)

◆ヒョウ 評(5) ヒャウ 源は「ー・ヘイ」に、林・学・新は「ビャウ・ヘイ」に対応させる。名：(音注「平」) 色：ヒャウ(「評ハカル」の傍記として)

◆フ 不(4) フ・ブ 学は「フ・フウ」として、「フ」を呉音とする。源は「ー・フツ(物韻)」に対応させ、ほかに「フ・フウ(有韻)」「フ・フ(虞韻)」「ヒ・ヒ(紙韻)」も上げる。林は慣用音を「フ」「ブ」とし、さらに「フ・フ」も上げる。新は慣用音を「フ」のみとし、ほかに「フ・フウ(有韻)」「フ・フ(虞韻)」も上げる。名：(音注「方久反」) 色：フ(ヨフ与不「不」に上声清点)・(フイ不意)

◆フ 夫(4) フウ・ブ 源は「フ・フ」に対応させる。林は慣用音を「フウ」のみとし、「ブ・フ」と「ブ」を呉音と扱う。学・新は慣用音を「フウ」とし、「フ・フ」に対応させる。名：(音注「扶」) 色：フ(「夫ヲフト」の傍記として)

◆フ 負(3) フ 林・学・新は「ブ・フウ」に対応させる。源は「ブ・フ」として、「フ」を漢音と扱い、慣用音は認めない。名：(音注「婦」) 色：ブ(ショウブ勝負 「負」に上声濁点)

◆フ 富(5) フウ 林・学は「フ・フウ」として、「フウ」を漢音と扱う。源は「フ・フ」に、新は「フ・ヒウ」に対応させる。名：フ(和音として「甫雷反」も) 色：フ(フカウ富豪)

◆フク 副(4) フク 学は「フク・フク・ー」として、慣用音は認めない。源は「ー・フウ(宥韻)」に対応させ、ほかに「フク・フク(屋韻)」も上げる。林は慣用音「フク」のほかに「フク・フク(屋韻)」も上げる。新は慣用音「フク」を指摘した上で、「ホク・フク(屋韻)」も上げる。名：(「孚豆反」「普遍反」音注「覆」も) 色：フ(?) (「副車ヒトタマヒ・ソヘクルマ」の「副」の傍記として)

◆フク 復(5) フク 源は「ー・フウ(宥韻)」に対応させ、ほかに「フク・フク(屋韻)」も上げる。学は「ブ・フウ(宥韻)」に対応させ、ほかに「ブク・フク(屋韻)」を上げる。新は慣用音「フク」とした上で、「ブク・フク(屋韻)」「ブ・フウ(宥韻)」を上げる。林は慣用音「フク」を指摘し、さらに「ブク・フク(屋韻)」「ブ・フウ(宥韻)」を上げる。名：フ・フク(和音として、ほかに「房富反、…又音伏」とも) 色：フク(ヘイフク平復)

◆ブツ 物(3) モツ 学は「モチとモツ・ブツ」として、「モツ」を呉音の一つとする。源・林・新は「モチ・ブツ」に対応させる。名：モチ(和音として) 色：ブツ・モツ(イチブツ逸物「物」に入声濁点。「イチモツ」も)

◆ブツ 仏(5) ブツ・ボツ 学は「ブツとブチ・フツ・ー」として、「ブツ」を呉音と扱う。源は「ブツ」「ボツ」の二音を慣用音と認め、前者は「ー・フツ(物韻)」「(広韻)」、後者は「ー・ホツ(月韻)」「(集韻)」に対応させる。林・新は「ブツ」のみ慣用音とし、「ブチ・フツ(新は「ボチ・フツ」)(物韻)」「ボチ・ホツ(月韻)」も記載する。名：部ツ(和音として「符弗反」、音「弼ヒチ」、音「費ヒ」も) 色：フツ(サンフツ讚仏「仏」に入声清点?)

◆ブン 分(2) ブ・ブン 源は「フン・フン(問韻)」に、学は「フン・フン(文韻)」「ブン・フン(問韻)」の両者に対応させる。林・新は「ブン」「ブ」を慣用音とし、さらに「ブン・フン(新は「ボン・フン」)(問韻)」「フン・フン(新は「ホン・フン」)(文韻)」を上げる。名：復ン(和音として「甫噴反」も) 色：フン(ガイブン涯分「分」に去声濁点)

◆ヘイ 平(3) ヒャウ 源など「ビャウ・ヘイ」に対応させる。名：(「皮兵反」音注「便」も) 色：ヒャウ(ヒャウトウ平等「平」に去声濁点?)・ヘイ(ヘイアン平安)

◆ベツ 別(4) ベツ 源など「ベチ・ヘツ」に対応させる。名：ヘチ(和音として「補徹反」も) 色：ヘチ(カフヘチ合別)・ヘツ(リヘツ離別「別」に入声清点?)

◆ヘン 返(3) ヘン 新は「ヘン・ヘン」として、「ヘン」を呉音・漢音共通の音とする。源・林・学は「ホン・ハン」に対応させる。名：(「甫晚反」「府元反」) 色：ヘン(ヘンハイ返閉)・ヘム(ヘムホウ返奉)

◆ベン 便(4) ビン 林・新は「ベン・ヘン(霰(線)韻・先(仙)韻)」「ピン・ヒン(眞韻)」として、「ピン」は呉音と扱う。源・学は「ベン・ヘン」に対応させる。名：ベン(和音「ベン」として「へ」に上声濁点「方連反」「婢面反」も)・ヒム 色：ヒン(ヒンキ便宜「便」に平声清点)

◆ホ 保 (5) ホ 林・学は「ホとホウ・ハウ」として、「ホ」を呉音に含める。源は「ホウ・ハウ」に、新は「ホウ・ハウ」に対応させる。名：ホ・ホウ (和 (音) として 音注「寶」も) 色：ホ (アホ阿保)・ホウ (「保食神ウケモチノカミ」の「保」の傍記として)

◆ボ 母 (2) ボ・モ 源は「モ・ボウ (有韻)」に対応させ、ほかに「モ・ボ (虞韻)」も上げる。林は「モ・ボウ」に、学は「ムとモ・ボウ」に対応させる。新は慣用音「ボ」「モ」を上げて、「ム・ボウ (有韻)」「モ・ボウ (虞韻)」と記す。名：ボウ (「ム 古某字 音「母ホウ (「母」に上声濁点) ソレ」と、音注として)・モ (和音として 「莫后反」も) 色：ボ (ボギ母儀 「母」に上声濁点)

◆ホウ 法 (4) ハッ・ホッ 学は「ホフ・ハフ・ー」とし、慣用音を認めない。源・林・新は「ホフ・ハフ」に対応させる。名：ホウ (和音として 「方乏反」も) 色：ホウ (ホウモン法文)・ハフ (ハフミ法美)・ハウ (レイハウ礼法)

◆ホウ 豊 (5) ホウ・ブ 源・林・新は「フ・フウ」に対応させる。学は慣用音を「ブ」のみとし、「フ・ホウ」に対応させる。名：復ウ (和音として 「敷隆反」も) 色：ホウ (「豊ユタカニ」の傍記として)・フ (フネウ豊饒)

◆マツ (4) 末 マツ・マ 学は「マチとマツ・バツ・ー」と、「マツ」を呉音の一つとする。源は「ー・バツ」に、林は「マチ・バツ」に対応させる。新は「マツ」「マ」の二音を慣用音とし、ほかに「マチ・バツ」を上げる。名：(莫曷反) 色：マツ (「末スエ」の傍記として)・マ (マカウ末額)・バツ (バツエフ末葉 「末」に入声濁点)

◆マン 満 (4) マン 源は「モン・ボン (願韻)」に対応させ、ほかに「マン・マン (早韻)」も上げる。学は「マン・バン (早 (緩) 韻)」として、「マン」を呉音とする。新は「マン・バン・ー (早韻)」「モン・ボン・ー (願韻)」として、「マン」を呉音とする。林は「マン・マン・ー (早韻)」「モン・ボン・ー (願韻)」を上げ、慣用音を認めない。名：マン (和音として 「莫旱反」も) 色：マン (ジュマン充満)

◆ミツ 密 (6) ミツ 学は「ミチとミツ・ビツ・ー」として、「ミツ」を呉音の一つとする。源は「ー・ビツ」に、林・新は「ミチ・ビツ」に対応させる。名：(靡筆反) 色：ミチ (ヒミチ秘密)・ヒツ (ヒツトウ密通 「密」に入声清点)

◆メイ 迷 (5) メイ 源は「ー・ベイ」に、林・学・新は「マイ・ベイ」に対応させる。名：メイ (和音として 「莫難反」も) 色：メイ (「迷マドフ」の傍記として)

◆メイ 盟 (6) メイ・マウ 源は「ー・ベイ (庚韻)」に対して「メイ」を、「ー・バウ (敬韻)」に対して「マウ」を慣用音とする。新は「ミヤウ・ベイ (庚韻)」に対して「メイ」を、「ミヤウ・バウ (敬韻)」に対して「マウ」を慣用音とする。学は「ミヤウ・メイ・ー」と、「メイ」を漢音とする。林は「ミヤウ・メイ・ー (庚韻)」「ミヤウ・マウ・ー (敬韻)」の二音を上げ、「メイ・マウ」は漢音と扱う。名：(音注「明」「皿」「孟」) 色：メイ (盟チカヒ (フ) の傍記として)

◆ユ 由 (3) ユイ 学は「ユ・イウ (尤韻)」を、新は「ユ・イウ (尤韻)」「エウ・エウ (蕭韻)」を記すのみで、慣用音には触れない。源・林は「ユ・イウ」に対応させる。名：(音注「猷」) 色：ユ (ユライ由来)・イウ (「由ヨシ」の傍記として)

◆ユ 輸 (5) ユ 源・林は「シュ・シュ」に、学・新は「ス・シュ」に対応させる。前述したように、この「ユ」は慣用音の典型としてよく言及されるものである。名：シュ (「尺朱反 音注「戌シュ」)

◆ヨウ 幼 (6) エウ 学は「イウ・イウ (有韻)」に対応させる。源は「ー・イウ (有韻)」に対応させ、ほかに「エウ・エウ (嘯韻)」「エウ・アウ (效韻)」も上げる。林・新は慣用音「エウ」を指

摘した上で、「ユ・イウ（宥韻）」「エウ・エウ（嘯韻）」も上げる。名：エウ（和音として） 色：エウ（エウセウ幼少）・イウ（「幼 イトケナシ」の傍記として）

◆リツ 立（1） リツ 源など「リフ・リフ」に対応させる。学は「リフ→リツの音は入声（つまり音）を日本で促音ツであらわす習慣によってなまった音」と説明する。名：リフ（「チリフ」は「禾（和）リフ」の誤記か） 色：リウ（リウヨウ立用・ドクリウ独立）

◆ワ 話（2） ワ 学には「エ・クッ・ワ」とあって、「ワ」を唐音とする。源は「一・クワイ（卦韻）」に、林・新は「エ・クワイ」に対応させる。高松（1982）には、「所謂唐音として問題がないであろう」（P.831）とある。名：（胡快反） 色：クワイ（タンクワイ談話）

## 2-2 常用漢字音訓表には認められていない慣用音

◆アイ 愛（4） エ 源は「アイ・アイ」に対応させる。林は「アイ・アイ・一」と、学は「オとアイ・アイ・一」と、新は「アイ・アイ・一」として、慣用音を記載しない。色：アイ（アイス愛）

◆カイ 貝（1） バイ 源など「ハイ・ハイ」に対応させる。名：（音注「拜」） 色：ハイ（「貝カヒ」の傍記として）

◆ギョウ 牛（2） ゴ 源は「一・ギウ」に、林・学・新は「グ・ギウ」に対応させる。名：コ（和音として、去声清点？ 「詰求反」も） 色：キウ（ケンキウ牽牛）

◆キョウ 供（6） グ 源など「ク・キョウ」に対応させる。名：クウ（和音として 「居用反」も） 色：ク（クキウ供給）・クキョウ（「供 タテマツル」の傍記として）

◆キョク 曲（3） ゴク 林のみ「コク・キョク」「ク・ク」に対して、慣用音「ゴク」を上げる。源・新は「コク・キョク・一」「ク・ク・一」を、学は「コク・キョク・一」を上げるのみで、慣用音の記載はない。名：コク（和音として 「丘岳反」も） 色：コク（テンコク詔曲 「曲」に入声清点？）  
・キョク（キキョク委曲）

◆キン 近（2） コン 源など「ゴン・キン」に対応させる。名：吾ム（和音として） 色：コン（コンシン近親 「近」に平声清点）・ゴン（シンゴン親近 「近」に平声濁点）・キン（キンリン近隣 「近」に去声清点）

◆キン 均（5） キン 新には慣用音の記載がない。源・学は「ウン・ウン（問韻）」に対応させる。林は「キン・キン（真韻）」「ウン・ウン（問韻）」をあげた上で、慣用音「キン」も載せる。名：（居純反 法中50） 色：クエン（「均ヒトシ」の傍記として）

◆キン 禁（5） ゴン 林・新は「コン・キン・一」、学は「コム・キム・一」として、慣用音を記載しない。源は「コン・キン」に対応させる。名：（音注「金」） 色：キン（キンコ禁固）

◆クン 訓（4） キン 学は「クン・クン・キン（唐音）」として、「キン」は唐音と扱う。源・林は「クン・クン」に、新は「コン・クン」に対応させる。名：クン（和音として 「吁運反」も） 色：クン（ケウクン教訓）・クエン（カクキン家訓）

◆サラ 皿（3） ベイ 源は「一・ベイ・一（梗韻 武永切 広韻による）」「一・パウ・一（梗韻 母梗切 集韻による）」として、「ベイ」を漢音とする。新も「ミヤウ・ベイ」と「ベイ」を漢音と扱う。林・学は「ミヤウ・メイ」に対して慣用音「ベイ」を上げる。名：（明丙反）

◆ジ 事（3） ズ 林は「ジ・シ」に対応させる。源・学・新は「ジ・シ・一」と慣用音を記載しない。名：ジ（和音として 「シ」に平声濁点） 色：シ（ワウシ往事 「事」に平声清点）

◆シュウ 周（4） ス 林・新は「シュ・シウ・一」として慣用音を認めず、学は「シュとス・シ

ウ・ー」として、「ス」は呉音の一つとする。源は「シュ・シウ」に対応させる。名：シウ（和音として 音注「州」） 色：シウ（周）・ス（スチ周知 「遠江・国郡」）

◆ショウ 障（6） サウ 新は「サウ・シャウ・ー」として、「サウ」を呉音とし、学は「シャウ・シャウ・ー」として、慣用音を認めない。源・林は「シャウ・シャウ」に対応させる。名：者ウ（和音として 「之譲・之楊」反）も 色：シャウ（「障サハル」の傍記として）

◆セツ 折（4） シャク 学は「セチ・セツ・ー（屑韻）」と、新は「セチ・セツ・ー（屑韻）」「ゼチ・セツ・ー（屑韻）」として、慣用音を記載しない。源は「ー・セツ（屑韻）」に対応させる（ほかに「ゼツ・ゼツ・ー（屑韻）」も上げる）。林は慣用音「シャク」に対して「ゼチ・セツ」「セチ・セツ」を上げる。名：シャク（「歯隻反（傍記「歯シ」「隻シャク）」もあり） 色：セツ（サウセツ相折「折」に入声濁点？）

◆セツ 説（4） ゼイ 源は「セイ・セイ（霽韻）」に対応させる（ほかに「ー・セツ（屑韻）」なども上げる）。学は「セイ・セイ（霽（祭）韻）」に対して慣用音「ゼイ」「セツ」の二音を上げ、ほかに「セチ・セツ（屑韻）」も上げる。林・新は慣用音「ゼイ」とし、「セチ・セツ（屑韻）」「エチ・エツ（屑韻）」「セイ・セイ（新は「セ・セイ」）（霽韻）」を記載する。名：セチ（和音として 「始悦反」、音注「悦」「税」も） 色：セツ（セツキャウ説経）

◆フ 父（2） ホ 源は「ー・フ」に、新は「ブ・フ」に対応させる。林は「ブ・フ」「フ・フ」として、慣用音「ホ」を載せる。学は「ブ・フ」「フ・フ」の両者に対して、「ホ」を上げる。名：フ（和音として、平声清点あり。 音注「腐」） 色：フ（イフ 異父）

◆ブ 部（3） ベ・フ 漢のみに見えるものである。源・林は「ブ・ホ・ー」「ブ・ホウ・ー」とし、「ベ」は、源では和訓と、林では国訓と扱う。新は「ブ・ホ」「ブ・ホウ」を上げるのみで、慣用音の記載はない。学は「ブ・ホ」に対応させて、慣用音「フ」を上げる。名：ブ（和音として、平声清点あり。「蒲後？反」も）・ホウ（「媧」の音注「部ホウ」として） 色：フ（ニウフ入部 「部」に平声清点）・ヘ（ニキタへ新田部）

### 3 ま と め

以上、各漢和辞典における慣用音の記述に即して、その実態を明らかにしてきた。大層煩雑なものとなったので、整理をし若干のコメントを付して、まとめに換えることにする。各漢和辞典における意見の相違も踏まえて、重複を避けることなく、その全体的な姿を提示するように努める。カッコ内に漢和辞典名（略号による）を示す。

#### (1) 異論のないもの（\*印は4字典に共通するもの）

##### <中国語とのズレが大きいもの—入声音など—>

\*庄アツ（～P） 漁レフ（←ギョ） 冊サツ（～k） 雑ザツ（～P） 接セツ（～P） 輸ユ（←シュ） 立リツ（～P）

これらは、中国語音との差異がはっきりとしており、もっとも典型的な慣用音である。

##### <その他>

\*院ケン 街ガイ 危キ 宮グウ 競キャウ \*郷ガウ 軍グン 劇ゲキ 激ゲキ 月ゲツ \*研ケン \*験ケン 後ゴ 紅ク 差サ \*次ジ 実ジツ 宗シュウ 縦ジュウ \*準ジュン \*除ヂ \*蒸ジョウ \*世セ 税ゼイ \*責セキ 染セン 造ザウ \*増ゾウ 茶チャ 注チュウ 賃チン 適テキ \*登ト 板バン 評ヒャウ \*平ヒョウ \*別ベツ 母ボ 迷メイ 幼エウ 貝バイ 牛ゴ 近コン 供グ 博バク 父ホ

呉音・漢音との対応に関しては、漢和辞典により差異があるものの、慣用音についての考えには違いがない。慣用音と扱うのに問題の生じない例である。

これらに比べると、以下は慣用音の扱いに、漢和辞典による相違が目立ち、いろいろと問題のある例である。

#### (2) 問題点のあるもの

##### <慣用音の記載がないもの>

反タン（源） 法ハッ・ホッ（学） 曲ゴク（源・学・新） 均ケン（新） 禁ゴン（林・学・新） 事ズ（源・学・新） 周ス（林） 障サウ（学） 折シャク（学・新）

「反タン」のように、源を除く3辞典が慣用音を認めるものがあるのに対して、「事ズ」のように林のみ慣用音を認めるといった違いが顕著に現れる。以下には、同様の、辞典による差異が現れることになる。

＜慣用音を認めず、呉音とするもの＞

育キク（源・学・新） 横ワウ（源・林・学） 画グウ（学） 回エ（源・学・新） 期ゴ（林・学）  
 空クウ（林・学） 減ゲン（林・学） 己コ（林・学） 告コク（学） 罪ザイ（林・学） 守ス（源・  
 学） 住チュウ（学） 従ジュウ（学・林） 述ジュツ（学） 術ジュツ（学） 推スイ（林・学・新）  
 寸スン（学） 舌ゼツ（学） 絶ゼツ（学） 洗セン（林・学・新） 属ゾク（林・学・新） 退タイ  
 （学） 断ダン（林・学・新） 通ツウ（林・学） 痛ツウ（林・学） 土ド（林） 銅ドウ（林）  
 導ダウ（林・学） 乳ニュー（林・学 学ニウ） 熱ネツ（学） 脳ノウ（林・学） 派ハ（林） 倍  
 バイ（林・学・新） 発ホツ（学） 不フ・ブ（学 フ呉音） 夫ブ（林） 副フク（学） 物モツ  
 （学） 仏ブツ（学） 返ヘン（新） 便ビン（林・新） 保ホ（林・学） 末マツ（学） 満マン  
 （林・新） 密ミツ（学） 愛エ（林・学・新） 周ス（学） 障サウ（新）

＜慣用音を認めず、漢音とするもの＞

育イク（源・学・新） 員キン（学） 覚カク（新） 欠（缺）ケツ（学） 告コク（学） 祝シウ  
 （林・学・新） 洗セン（林・学・新） 側ソク（学） 卒ソツ（学） 率ソツ（学） 退タイ（学）  
 柱チュウ（林・学 林チウ） 坂ハン（林） 否ヒ（学） 負フ（源） 富フウ（林・学） 副フク  
 （学） 返ヘン（新） 満マン（林） 盟メイ（林・学）・マウ（林） 愛エ（林・学・新） 皿ベイ  
 （源・新）

＜慣用音は認めず、唐音とするもの＞

打ダ（学） 話ワ（学） 訓キン（学） 納ナ（学）

＜慣用音は認めるが、呉音と重なるものがある場合＞

員キン（新） 横ワウ（新） 減ゲン（新） 合ガフ（林） 告コク（源・林・新） 差サ（源・新）  
 推スイ（源） 洗セン（源） 造ザウ（林） 属ゾク（源） 退タイ（源） 断ダン（源） 土ド（源）  
 倍バイ（源） 番バン（新） 否ヒ（源） 不フ（源・林・新） 副フク（源・林） 復フク（源）  
 母ボ（源・林・学・新） 満マン（源）

＜慣用音は認めるが、漢音と重なるものがある場合＞

覚カク（源・林・学） 欠（缺）ケツ（源・林） 告コク（源・林・新） 差サ（源・林・学）  
 殺セツ（新） 祝シウ（源） 推スイ（源） 洗セン（源） 卒ソツ（源・林・新） 退タイ（源・林・  
 新） 適テキ（源・林・学・新） 否ヒ（源・林・新） 不フ（源・林・新） 副フク（源・林・新）  
 復フク（源・林・学） 満マン（源） 母ボ（源） 幼エウ（源・林・新）



＜慣用音そのものに異説があるもの＞

欠(缺) ケツ・カン(林)、ケツ(新 「欠」に対応) 殺セツ(源・林・新)、サツ(学) 雑ザツ・ザフ(学・新)、ザツ(源・林) 従ジュウ・ジュ(林)、ジュウ(源・学・新) 石コク・シヤク(源・林・新)、コク(学) 判バン・ハウ(林)、バン(林以外) 不フ・ブ(源・林)、フ(新) 夫フウ・ブ(源・学)、フウ(林・新) 部ベ(漢)、フ(学) 仏ブツ・ボツ(源)、ブツ(林・新) 分ブン・ブ(林・新)、ブ(源・学) 母ボ・モ(新)、ボ(新以外) 豊ホウ・ブ(源・林・新)、ブ(学) 末マツ・マ(新)、マツ(林・学) 説ゼイ・セツ(学)、ゼイ(源・林・新) 納タフ・ナフ・ナ・ナツ・ナン(新)、タフ・ナツ・ナ・ナン(林)

＜慣用音説が少数派に過ぎないもの＞

育イク(漢) 横ワウ(新) 回エ(林) 曲ゴク(林) 事ズ(林) 部ベ(漢)

＜音声環境等に関わる音変化に過ぎないもの－音便など－＞

判ハウ(林) 法ハッ・ホッ(源・林・新) 納ナツ・ナン(林・新)

「法」「納」は「ハフ・ホフ」「ナフ」を基本に捉えるべきもので、これらの慣用音といわれるものは、その音便形に過ぎない。ことごとく慣用音と説明する必要もないであろう。「判」は、一般的には慣用音として説明することも可能かとは考えるが、本来は撥音表記の問題と関わる、一種の音変化の問題であることには変わりがない。

- 〔参考文献〕 高松政雄『日本漢字音の研究』「第六章 慣用音」(風間書房 '82. 9)  
湯沢質幸「漢字の慣用音」(『漢字講座』3 明治書院 '87. 11)

A Study of Kan'yô-on(慣用音) in Kanji (漢字) Characters  
that pupils learn in the elementary school

N o b u o S a t ô

In this paper, I should like to study kan'yô-on(慣用音) of kanji characters in Modern Japanese. Kan'yô-on is the particular on(音)-readings that deviate from the original chinese readings, for example, " in "(院).

The kanji character " 院 " has goon(呉音)-reading,kanon(漢音)-reading " en " and kan'yô-on " in ".

I should like to study kan'yô-on in comparison with goon-reading and kanon-reading.